

江戸時代における光琳像の変遷について (下—七)

—酒井抱一〈六〉—

安田 篤生 美術教育講座 (美術史)

承 前

尾形光琳 (一六五八—一七一六) について語る場合、現在では「琳派」の絵師として取り上げるのが定着している。しかし、光琳在世当時、「琳派」という流派が存在していた訳ではない。「琳派 (尾形流)」を代表する絵師として光琳を位置づけたのは酒井抱一 (一七六一—一八二八) が初めてで、光琳が没しておよそ百年後のことである。文化十年 (一八一三) 冬に『緒方流略印譜 (二枚摺)』を版行した抱一は、光琳百年忌にあたる同十二年六月に改訂版にあたる『尾形流略印譜』一冊を上梓したのである。しかし、抱一以前から諸書において光琳について言及されており、前稿まで、抱一の著作も含めた江戸時代の文献を通して窺える光琳に対する認識、すなわち江戸時代における光琳像 (イメージ) の変遷についてたどってきた。

特に前稿では、抱一が『尾形流略印譜』に描き出した「尾形流」についてまとめるとともに、文化十二年版の内容を増補して中野其明が明治二十五年 (一八九二) に春陽堂から刊行した明治版等の『尾形流略印譜』諸本について検討を加えはじめた。しかし、章の途中で与えられた紙数が尽きてしまい、本稿で検討を続けることとした。

一〇、『尾形流略印譜』の諸本 (続)

『尾形流略印譜』の諸本に関して、前稿で論じた内容で本稿に関わるのは次の点である。現在、版本 (冊子) の形で確認できるのは、酒井抱一が文化十二年に刊行した本 (文化十二年版) と明治版であるが、明治版が文化十二年版をどのように増補しているのかを示す「表20」を前稿に掲げた。その「表20」からも窺えるように、全二六丁からなる明治版の内容は、本文第一八丁裏にある鈴木其一 (一七九六—一八五八) の後記までとそれ以降に大きく分かれており、前稿では

其一の弟子である中野其明 (一八三四—九二) が増補した第一九丁表以降について検討を加えたのである。

(三) 其一増補本

すでに玉蟲敏子氏が指摘されているように、文化十二年版や明治版以外に、一部異なる内容を備えた『尾形流略印譜』が存在したと想定されている。例えば、明治版の本文第一八丁裏に「先生之書跡著者撰一二為追加／嘉永甲寅初秋／菁々其一「元長」(朱文方印)」という鈴木其一による後記があることから、これより前の部分は嘉永七年 (一八五四) 七月以前に増補改訂されていると考えられる (以下、明治版の本文第一八丁裏までを其一増補本と呼ぶ) (図31)。前稿で見た明治版の構成からも其一増補本が存在したことは確実だと考えられ、文化十二年版からどのように増補しているのかを確認することとした。

明治版を文化十二年版と対照させた「表20」を見ていくと、前稿で触れた「光琳子壽市郎方淑」に関する部分以外では、文化十二年版に名があげられている絵師の項目に単に款印を追加している場合が多い。宗達、順定、宗仙、光琳、何昂の場合がこれに当たる。明治版で新たに項目を立てて伝記と印章を載せている絵師の中で特に注目されるのが、冒頭に置かれた本阿弥光悦である。「本阿弥光悦は慶長年間の人以書海内に鳴る画又一風を為す宗達光琳の祖とするところなり尤古土佐の風によりて細筆の哥仙など世に残決あり草画金銀にて繪き淡彩も稀に有り」と記されている内、とりわけ重要なのは「宗達光琳の祖とするところなり」という部分である。すなわち、宗達を劈頭に掲げていた文化十二年版と異なり、光悦をこの系譜の始祖として位置づけているのである。既に指摘したように、谷文晁や菅原洞斎らと交友があり、洞斎が主催した古書画展観会にも参加していた檀山坦斎が文政二年 (一八一九) に刊行した『皇朝名画拾彙』巻五に俵屋宗達の項を立て、「所画最似光悦其師受先後未得詳矣」と指摘していた。坦斎がこの項目を記した段階ではまだ曖昧であった宗達と光悦の関係について、根拠は不明な

から、光悦の方が先行するという認識を示したものといえよう。また、第一五丁表から第一六丁裏にかけては、絵師名を項目に示してはいないものの、文化十二年版には含まれていなかった永田友治、始房、伊豊、友禪、破笠、藤原古致の款印を載せ、伊豊には簡単な説明も付けている。その他、伝記の内容などを改訂しているのが始興と芦舟で、始興の場合、文化十二年版では「渡邊求馬近衛殿下の家士なりと言ふ光琳の遺風をしたひしかも不劣もの有又不出来も有ものなり」としていたのを「渡邊求馬近衛豫樂院家熙公の家士也光琳門人にて尤其風を得たり末葉は加茂杜家に有と言ふ」に変え、伝記に関する内容を充実させている。また、芦舟の場合、文化十二年版では「蘆々子 光琳の画によく似たり」と絵師名自体誤っていたのを「芦舟 光琳遺風何人かしらす」と正しく改訂している。

ところで、ここまで其一増補本と呼んできたが、文化十二年版からの増補改訂を誰が手がけたのかを明らかにすることは難しい。もちろん、其一も光琳画の鑑定を手がけており、そこで得た款印等の情報を利用することもできたであろう。しかし、文化十二年版を刊行して以降も文政十一年に没するまでは抱一の下にこそ光琳をはじめこの系譜に関連する情報もたらされていたはずであり、宗達に替えて光悦をこの系譜の祖とするような大きな改訂は抱一でなければ不可能だと考えることもできよう。抱一が文政九年に上梓した『光琳百図』後編の自跋において光琳のことを「緒方先生」と記していることから、其一の後記に「先生之書牀著者撰一二為追加」とある「先生」を光琳と解し、文字通り理解するなら、第一七丁裏と第一八丁表に収録されている光琳の款印のみを其一が補ったことになる。一方、抱一が没してから後記が書かれるまでに二十五年以上あり、その間に其一がそれ以外の増補改訂作業を何もしなかったのかとの疑問も拭いきれない。文化十二年版からの増補改訂を誰が行ったのかについては、後に『古画備考』引用本についての検討も踏まえて改めて考察することにした。

また、其一増補本が刊行されたのか、現時点で明らかにしえない。これまで指摘されているように、『国書総目録』に「嘉永七版―旧京城大」とあるものの、当該本の存在が確認されていないのである。一方、前述したように、『光琳百図』前・後編の版木が焼失した後に復刻して出版したのが其一であることが知られており、本稿の検討からも其一が文化十二年版を増補改訂した『尾形流略印譜』の原稿をまとめたことは確かである。

（四）『古画備考』引用本

朝岡興禎が編集した『古画備考』（東京藝術大学附属図書館所蔵原本）三十

五・光悦流の各所に、「光琳印譜」として『尾形流略印譜』が引用されていることは周知のことであろう。興禎が『古画備考』の当該部分を起筆したのは嘉永四年六月十日であるが、玉蟲氏は、其一が後記を記した嘉永七年七月に先行して執筆が始められたこの巻に引用されている「光琳印譜」の内容が文化十二年版と異なることから、其一増補本に先立つ『古画備考』引用本の存在を想定されている。

『古画備考』三十五・光悦流に引用されている「光琳印譜」（以下、『古画備考』に引用されている「光琳印譜」（『尾形流略印譜』を『古画備考』引用本と呼ぶ）について検討するために、明治版（第一八丁裏までは其一増補本）と対照させた「表21」を作成し、本文末尾に掲げた。文化十二年版ではなく明治版と対照させたのは、玉蟲氏が指摘されているように、『古画備考』には其一増補本で追加された宗達等の款印や文化十二年版に含まれていなかった光悦や友禪、破笠、伊豊、始房、永田友治、藤原古致の項目を立てて明治版と一致する款印を載せているからである。また、前稿において明治版の第一八丁裏にある其一後記より後の部分は其明が増補したと指摘したように、『古画備考』の本阿弥光甫や抱一、鶯蒲の項目には「光琳印譜」からの引用は一切見られない。さらに、「表21」に示したように、明治版の第一九丁表以降に増補された光悦や光琳、乾山、立圃、始興、宗理の款印は『古画備考』に引用されていない。以上のことから、『古画備考』引用本が明治版の第一八丁以前、すなわち其一増補本に極めて近いことは明らかである。

そのことは、『古画備考』引用本に記されている絵師の略伝のほとんどが、内容のみならず用字や書風に至るまで其一増補本と極似していることから確認される。例えば、『古画備考』引用本の光悦の項（図32）を其一増補本と比較すればその近似性は明らかで、一方が他方を臨模したか共通の祖本を臨写したと考えるほかない。また、この光悦の項は其一増補本で追加されたものだが、その書風を抱一の手になるとみられる宗達など文化十二年版からある項目と比較してみると、一定の類似性を認めることができる。一方、「書」や「為」などは其一後記とも近似しており、印刷された明治版や筆写された『古画備考』から光悦の部分を書いたのが抱一であるのか其一であるのかを判断することは困難である。

一方、「表21」から明らかのように、『古画備考』引用本が其一増補本と完全に一致しているわけではない。まず、項目の立て方から見ていくと、『古画備考』では其一増補本にはない野々村是真の項目を立て、其一増補本では絵師名を記することなく宗仙の下に収録されていた款印を載せている。また、やや複雑なのが順

定の場合で、本文には其一増補本をそのまま引用し、其一増補本では別人とされている宗仙の略伝と款印を載せた付箋を添付している。これは、項目名に「順定号宗仙」とし、宗仙を載せる付箋にも「順定ノコト歟」と記すように、順定と宗仙を別人と見なす『尾形流略印譜』と異なり、『古画備考』では谷文晁編『本朝画纂』と同じく両者を同一人物とする立場からきている。「光琳印譜」と異なることを明示してこの立場をとったのは、興禎の判断であろう。さらに複雑なのが、方淑と光是の場合である。前稿で指摘したように、其一増補本では、「光琳子壽市郎方淑」と正確に記しながら何故か款印には「光琳孫以十画」「光是之印」（朱文方印）を載せていた。それに対して『古画備考』では項目を分け、方淑については「光琳男壽一郎」と「光琳子壽市郎」を併記し、其一増補本が光琳の使用印から削除した「方□〔淑〕」（朱文方印）を載せている。次いで光是の項目を立て、「光琳孫以十」と記して其一増補本では方淑の款印としていた「光琳孫以十画」「光是之印」（朱文方印）を載せているのである。順定の場合は、順定のところに「光琳印譜宗達ノ次二出」、宗仙のところでも「順定ノコト歟／光琳印譜別二出」と記していることから、参照した『尾形流略印譜』自体は其一増補本と同じ内容であり、興禎の判断で順定と宗仙を同一人物としたのだと考えられる。それに対して、方淑と光是の場合、方淑について「壽一郎」と誤記した理由も不明だが、文化十二年版にはあるが其一増補本にない「方□〔淑〕」（朱文方印）を載せており、「光琳孫以十画」「光是之印」（朱文方印）の款印を光是（以十）のものとする点も其一増補本と異なり文化十二年版に近い。朝岡興禎が其一増補本と文化十二年版の双方を参照したのだと考えることもできるが、其一増補本が現在の形になる前段階のもの、あるいは其一増補本を基本としつつ他の何者が改訂した別本を参照したとも考えられる。この点については、他の記載内容とも考え合わせ、後に考察を続けることにしたい。

先に『古画備考』引用本の略伝が其一増補本と極似していると指摘したが、いくつか例外がある。まず、長洲の場合、印章は「光印」（「光琳印譜」）からの引用であることを示して文化十二年版や其一増補本と一致するものを載せる。しかし、「浪華の人光琳の遺風を學ぶ安永天明のころの人なり」という伝記をそのまま転載することはせず、「大坂人安永天明比人」とやや簡略にしている。また、既に指摘したように、『古画備考』は芦舟を長沢芦洲と誤解して「按応拳弟子蘆雪嗣也上人誤テ印譜ニ入ト云」としており、「光琳遺風何人かしらす」という『尾形流略印譜』と全く異なっている。このような誤解が生じた原因は不明であるが、「印譜ニ入ト云」という言い回しから興禎自身の判断ではないとみられる。

「表21」に示した『古画備考』引用本と其一増補本に収録されている款印の異同についても少しみていくと、明治版第一七丁表に載せられている抱一の識語より前に収録されている款印のほとんどが『古画備考』に収録されていることが分かる。そうした中であって、光琳の使用印として文化十二年版にも載る「□琳」（朱文方印）と其一増補本で追加された「鶴岡逸子何昂」の款記は引用されていない。これは、興禎が「光琳印譜」に所載されているのを知りながら収録するのを見合わせた可能性もあるが、この二点以外をすべて転載していることを考えると不注意によるのかもしれない。

款印についてより注目されるのは、明治版第一七丁裏と第一八丁表に収録されている光琳の款記三点が『古画備考』に引用されていない点である。其一が後記を認めたのが興禎が『古画備考』の当該部分を起筆した後の事であるので、其一が光琳の款記三点を補ったのはその間のことである可能性もある。ここで三点の光琳の款記が『古画備考』に引用されていないことに注意を促したのは、其一増補本が成稿する以前に同様の内容を備えた『尾形流略印譜』が刊行された可能性があるからである。それは相見香雨氏が所蔵されていた雨庵庵伝来とされる一本で、「薄い雁皮紙十八枚の版本で、表紙は水色の紙へ雲母で菖蒲のやうなものが印刷されて」おり、「明治二十五年に中野其明が増補して春陽堂から出した本の前半十八枚の処と同様で、之には光悦その他の増加があるから印数合計九十五顆ある」とされている。明治版の其一後記は第一八丁裏にあり、谷文晁の序一丁を含めると全十九丁になり、丁数が合わない。しかし、仮に第一七丁表にある抱一の識語の裏が白紙で、そこまでで完本であったとすると全一八丁になり、収録されている印章も九十五顆で相見氏が記される内容と一致する。従って、このような本が存在した可能性を排除することはできないが、相見氏所蔵本を目にすることができない現在、仮定の話にとどまる。

ここまで『尾形流略印譜』諸本について検討してきたが、判断を保留してきた二つの問題について見解をまとめておきたい。一つは、『古画備考』引用本と其一増補本の関係についてで、別の言い方をするなら『古画備考』の編者である朝岡興禎はどのような「光琳印譜」（『尾形流略印譜』を参照したのか）についてである。この問題については、『古画備考』引用本の随所に「坦書入」という注記があることから、興禎は檜山坦齋がメモを書き入れた『尾形流略印譜』を使用していたらしいとの見解を玉蟲敏子氏が示されている。確かに、『古画備考』の該当部分にしばしば坦齋の名を見ることができ、「光琳印譜」からの引用部分に限定した「表21」の範囲内でも、第二〇丁表に其一増補本にも載る「光琳」（朱文方

印）を掲載し、その傍らに「坦書入長一寸五分 梅画横絹／文字ハコレト同ク一寸六分ノ印アリ琳ノ下ヒロシ輪太シ切タル所ナシ」と記している。また、「光琳印譜」からの引用であるのか不分明だったので「表21」には載せなかったが、「光琳印譜」に所載される光琳の款印を列挙した末尾に、其一増補本にない「□□」（朱文方印）を加え「坦書入／光琳なり」と注記している。宗雪や何帛にも同様の例が見られることから、興禎が参照したのが坦斎の書き入れのある『尾形流略印譜』であつたことは確実である。では、坦斎が書き入れをした『尾形流略印譜』とはどのような内容を備えたものだったのだろうか。それは、今回の検討の結果から、其一増補本から第一七丁裏と第一八丁表に増補された光琳の款印を除いたもの、すなわち先に仮定した相見香雨氏旧蔵本に極めて近いものであることが明らかになった。光悦の項も其一増補本と書風も含めて同じ内容を備えるものであつたが、全く同じものではなく、坦斎独自の見解も盛り込まれていたとみられる。先に芦舟を長沢芦洲と誤解したのは興禎ではないと指摘したが、「上人誤テ印譜二入ト云」と抱一のことを「上人」と呼んでいることから、坦斎の見解であつた可能性が高い^⑤。また、方淑と光是の項目の立て方と記載内容も其一増補本と異なっていたが、ともに「光琳印譜」からの引用であると記している^⑥ので、坦斎書入本の段階でそのように掲載されていた可能性がある。

もう一つの問題は、其一増補本の増補改訂を誰が行つたのかについてである。文政十一年（一八二八）に没するまでは抱一が文化十二年版に改訂を加え、その後を其一が引き継いだと考えることは可能である。しかし、其一増補本の光悦の部分^⑦を他と比較しても書風から二人のどちらの手になるのか決定できなかったように、文化十二年版以降に増補改訂された部分のどこが抱一により、また其一によるのか、判別することは困難である。状況を勘案して、光悦を追加してこの系譜の祖とする大きな改変を行つたのは抱一であると考えたとしても、独自の見解であると断定するのも難しい。というのも、『古画備考』三十五・光悦流の成立に深く関わっていた檜山坦斎が文政二年に刊行した『皇朝名画拾彙』の宗達の項で光悦との関係について触れていることは既に指摘したとおりだが、同書には光悦も収録されており、後述するように、書に秀でて絵画では歌仙絵が知られていると述べている。其一増補本の光悦の項とその点では共通しており、文化十二年版からの増補に天保十三年（一八四二）まで生存していた坦斎が関与していた可能性も排除できない。以上のように、文化十二年版からの改訂作業を誰が行つたのかについては、状況から抱一が中心になった可能性が高いと推定できるもの、なお明確にしたいといわざるを得ない。

一一、『尾形流略印譜』（文化十二年版）以降

『尾形流略印譜』に関する検証に紙幅を費やしてしまった。略印譜について残された問題は、その影響の大きさも含めて後に考察することとし、文化十二年に略印譜が上梓されて以降に示された光琳像（イメージ）をたどることにしたい。

（一）『光琳漫画』

『尾形流略印譜』が刊行された二年後の文化十四年（一八一七）、江戸の書肆・竹川藤兵衛、英屋平吉、角丸屋甚助から『光琳漫画』一冊が出版された。内容は、何帛について検討した際に触れたように、いわゆる光琳模様を集録したもので、光琳模様全体を俯瞰する中で考察されるべきだと考えられる。本稿の主旨とはやや離れるので、内容に関する検討は別の機会に譲りたいが、序には光琳について次のように記されている。

尾形光琳は京師の人なり、狩野安信を師としして頗るつとめたり、しかれども伊年宗達^⑧が風在て、自ら一家をなして、雷名^⑨今古に高し、名を寂明といひ、又方祝^⑩といふ、青々堂^⑪長江軒^⑫の号あり、兼て茶事に通じ小細工を善す、枯木石を以て仮山水を作るに妙なり、今鈴山と唱るもの即ち其余風なり、爰に書肆光琳漫画となづくるは、是其漆器時絵などに用ひし處の翁が圖どりの手澤なり、好事某深く秘置しを乞得て梓にのぼせ、同志の人に示すといふも、是亦家業をつとめたりといふべしや、江戸 花笠外史

花笠外史については未詳だが、光琳に関する指摘は「尾形氏名ハ寂明青々堂、長江軒ノ号アリ、京師ノ人、画ヲ狩野安信ニ学テ、一家ヲナス、又漆器ヲ作、描金ヲヨクス、兼テ茶事ヲ好ミ、假山水ヲ作ル、スベテ其為所天機ニ觸發シテ、舊套ヲ脱シテ益奇也、^⑬」という『新撰和漢書画一覽』の記載と一致する部分が多い。天明六年（一七八六）に出版された『新撰和漢書画一覽』についてはこれまでもしばしば言及してきており、別に論じたこともある。同書は初版刊行後も寛政十二年（一八〇〇）、文化六年、同十一年と版を重ねており、文政四年（一八二一）と天保六年（一八三五）には増補版が出されるなど、江戸時代中期から後期にかけて刊行された小型書画人名辞典の中で最も広く流布したものである。光琳についてそこに記されている内容と異なるのは、「方祝」の名を加えている点と、「しかれども伊年宗達が風在て」と光琳が狩野派に学びつつも宗達の画風を

取り入れているとする点である。二つの相違点の内、特に後者が重要だと考えられる。では、その典拠はどこにあるのだろうか。既に見たように、抱一は文化十年冬に版行した『緒方流略印譜（一枚摺）』でも文化十二年版でも、光琳について「時を隔て宗達の風を慕（ふ）」と指摘している。しかしながら、それ以外の記載内容は一致せず、略印譜を見て書かれたものではない。略印譜に先だって延享三年（一七四六）に出版された『茶人花押藪』にも、光琳について「天性好^レ畫^ヲ、法^ヲ於^ニ養朴齋常信^ニ」又慕^ル土佐家及^ヒ宗達^ノ筆意^ヲ頗^ル出^ル新意^ヲ」と記されていたが、宗達の筆意を慕ったという箇所以外は相違しており、この書によったとも考えられない。『光琳漫画』の末尾に「法橋光琳造／先師之秘本也／可珍可寶 何帛」と、光琳が宗達の扇面画を写した「畫本」を乾山から継承した何帛の名が記されていることと関連するのかもしれない。しかし、元文三年（一七三八）に乾山から「畫本」を譲り受けた何帛が『光琳漫画』刊行時点に生存していたとは考えにくく、その元にあつたという伝本が本書の成立にどのように関わっているのかも判断としない。従って、「しかれども伊年宗達が風在て」という序文の記載内容がいかなる典拠に基づくのかは不明である。

（二）『本朝古今書画便覧』

文化十五年には、河津山白の編纂した草稿を二本肇美が補訂したという『本朝古今書画便覧』横小本一冊が江戸、大坂、京都の書肆から刊行されている。二本肇美については不明だが、河津山白については『続茶人花押藪』の編者として既に言及したように、京都で生まれ文化元年頃江戸に出て翌年十月に没している。いろは順に書画に名のある人々の名号や略伝を収める同書を繙くと、古筆了意の門人で書画の鑑定に優れていたという山白の草稿に含まれていたのか肇美が補訂したのかは不明ながら、宗達と光琳、乾山、始興について次のように記されているのを見ることができる。

宗達^{タツ}（野村氏名ハ以悦号ハ伊年又劉青軒元能州ノ産加賀ニ住シ後京師豊宗寺ニ居ス法橋ニ叙ス画法一家ヲ成ス世ニ宗達流ト称ス）

々々（喜多川氏通名俵屋――京師ノ人後泉州堺ニ住ス画法一家）（40ウ）

光琳^{ワウリン}（緒方宗謙ノ季子名ハ方祝通称雁金屋藤重郎江戸ニ住ス一名道崇又寂明潤声伊亮等ノ數号有享保元年四月六日ニ没ス五十二歳画ヲ狩野常信ニ学ヒ土佐家ヲ慕フテ新意ヲ出ス法橋ニ叙ス又漆器ヲ作り描金ヲ善シ茶事ヲ好ミ假山

ヲ造ル風流ノ人ナリ）（51オ・ウ）

乾山^{ケンサン}（緒方宗謙ノ仲子名ハ深省通名新三郎初メ京師ニ住ス後双岡住ス其時号シテ尚古又習静堂トモ紫翠靈海陶隱等ノ号アル晩年江戸ニ住シ寛保三年六月二日ニ没ス八十三歳嘗テ廣沢長好ニ因テ和歌ヲ学ヒ又茶法ヲ瑞流宗佐ニ学フ又画ヲ善ス好テ陶器ヲ製ス花様ヲ画キ讃詞ヲ加フ底面乾山ノ両字アリ又日本雍州乾山陶器省造ル之文字ヲ記ス世ニ乾山焼ト称ス）（56ウ）

始興^{シコウモトキ}（渡邊氏名ハ―通名ハ求馬初メ画ヲ狩野家ニ学ヒ後光琳ヲ師トス自ラ尚信ノ画風ヲ好ム京師ノ人一ツニ禁闕ノ士一ツニ近衛殿ノ臣ト子孫近頃迄アリ）（82ウ）

光琳から見ていくと、伝記に関して「緒方宗謙ノ季子」で「通称雁金屋藤重郎」といい、「享保元年四月六日ニ没ス五十二歳」としている点や、画歴に関して「画ヲ狩野常信ニ学ヒ土佐家ヲ慕フテ新意ヲ出ス」と指摘して宗達との関係に触れない点などは『尾形流略印譜』の記載や現在の認識と異なる。漆芸や茶事などに触れる点は先に指摘した『新撰和漢書画一覽』にも見られるが、より近いのは先述した『茶人花押藪』や山白自身が編集して文化二年までに版行した『続茶人花押藪』である。既に全文を掲げ検討を加えているが、比較のために再掲すると、「法橋光琳（幕形花押）」を載せる『茶人花押藪』は、光琳について「号^ス青々堂又長江軒寂明^ト天性好^レ畫^ヲ、法^ヲ於^ニ養朴齋常信^ニ」又慕^ル土佐家及^ヒ宗達^ノ筆意^ヲ頗^ル出^ル新意^ヲ」以^ニ二點^ノ模^ス花葉鳥蟲形^ヲ莫^レ不^レ新意^ヲ如^ハ漆器^ノ模金之花様亦超^ス吁時流^ニ遂起^ス一家之画流通^ス茶事^ノ巧造^ス假山^ノ可^レ謂^フ風流人物^ト矣」と記している。

また、「尾形光琳（花押）」と「方祝（花押）」を載せる『続茶人花押藪』は、「宗謙男称^ス藤重郎^ト有^リ道崇潤声号享保元年四月六日卒^ス五十二歳^ト」としている。『本朝古今書画便覧』との類似性は明らかで、画法を狩野常信（養朴）に学び土佐家を慕って新意を出したとする点や漆芸や茶事などについての言及は『茶人花押藪』に見られ、通称が「藤重郎」であるとする点や没年、享年は『続茶人花押藪』の記載と一致する。光琳が父・宗謙の「季子」、すなわち末子であるということと関連すると考えられる。一方、『茶人花押藪』や『続茶人花押藪』と異なる点もある。その内「江戸ニ住ス」というのは、京都に生まれて京都で没した光琳が一時江戸で活動していたことと関連するとみられる。しかしながら、『茶人花押藪』にも

「慕土佐家及宗達筆意」と土佐家とともに宗達の筆意を慕ったと指摘されているにもかかわらず、宗達との関係に全く触れない理由は不明である。

『本朝古今書画便覧』の記載内容が「茶人花押藪」や「続茶人花押藪」と密接な関係にあることは、乾山の項を見ても明らかである。「尾形眞省」の名の下に（袋形花押）を載せる「茶人花押藪」は、乾山について「光琳弟也住京師」後退鳴滝村巧陶器畫花樣加讚詞底面有乾山之兩字又記日本雍州乾山陶隱省造之文字世称乾山焼」と記している。また、「紫翠老人（花押）」を載せる『続茶人花押藪』は、「宗謙男光琳兄作弟者誤也称新三郎有居其尚古紫翠玉堂畫海等數號寛保三年六月二日没歳八十三嘗從于廣澤長好學和歌又有名譽茶法學于瑞流宗佐」としている。乾山を光琳の弟と正しく指摘している『茶人花押藪』に対して、『続茶人花押藪』は光琳の兄と誤っていることについても既に指摘したとおりだが、『本朝古今書画便覧』では山白自身が編集した後者の見解を採用し、宗謙の「仲子」（次男）であるとしている。また、両書の間に刊行された『新撰和漢書画一覽』にも「尾形氏名ハ眞省、光琳ノ弟也、洛西鳴瀧村ニ隠ル、画ヲヨクシ、又陶器ヲ作ル、自ラ陶隱ト号ス、世ニ乾山焼ト称シテ清玩トス」と記されている。逐一指摘するまでもなく、『本朝古今書画便覧』に記されている内容がここに挙げた三書の範囲をほとんど超えていないことは明らかである。わずかに三書に見えないのは、「双岡」に住んでいたという点と「晩年江戸二住シ」という点である。この内前者は、『茶人花押藪』などに鳴滝村に住んでいたというのを近隣の地である双岡に替えたものだが、変更した理由は明らかでない。また、乾山は確かに江戸に移住してその地で亡くなっており、当時江戸で知られていた何らかの情報に基づいてのことと考えて良いだろう。

次に、宗達について見ていくと、能登の生まれで加賀に住んだ後に京都に移って「宗達流」を形成した法橋宗達（野村氏、号・伊年）と京都に生まれ堺に移住した俵屋宗達（喜多川氏）を区別しているのが特徴である。もちろん、このような見解は『尾形流略印譜』や現在の認識と一致しない。先行する文献で幾分近いのは『新撰和漢書画一覽』で、宗達の項に「名ハ伊年法橋位京師ノ人画法一家ヲナシ、花卉禽虫ヲ作。世ニ宗達流ト称ス、又万年宗達ト称スルモノ、伊年ノ族ナリ。其子孫加州ニ仕事、世々宗達ヲ通称トス。各其号ヲ異ニス。万年ノ後李少年又郭大年ト称スルモノ並ニ画ヲヨクス。然トモ伊年万年ニ不及コト遠シ。」と記している。しかし、それと比べても、宗達を称する絵師が複数存在し、法橋に叙任された京都の宗達が「宗達流」を称しており、加賀に住むものがいたという箇所くらいが類似するにとどまる。

始興に關しても、「渡邊氏求馬ト称ス。画ヲ狩野家ニ学テ。後一家ヲナス。尤

光琳ノ風ヲ慕フ。京師ノ人」と記す『新撰和漢書画一覽』と比較して、「渡邊氏」で「求馬」を称した京都の人で、狩野派を学んだという点で一致し、光琳の画風を採用しているとする点も近似する。しかし、狩野尚信の画風を好み、「禁闕ノ士」（天皇の臣下）または近衛家の家臣で近頃まで子孫がいたという点は『新撰和漢書画一覽』にない。また、『尾形流略印譜』には、始興は渡邊求馬とい光琳の画風を慕っていたということとともに、近衛家に仕える家臣であったと記されている。近衛家との関係に触れる点で類似していると言えなくもないが、近衛家との関係に限定する略印譜を参照しているとは考えにくい。

以上の検討から、『本朝古今書画便覧』の光琳、乾山、宗達、始興の記載内容と、『茶人花押藪』や『続茶人花押藪』、『新撰和漢書画一覽』との間には一定の類似性が認められ、それらを参照している可能性が高いと考えられるが、『尾形流略印譜』を参照している形跡を見いだすことはできなかった。また、これらの先行書に記されていない内容を何に基づいて記載しているのかを明らかにすることはできなかった。

小 結

本稿において、前稿に引き続いて『尾形流略印譜』諸本についても検討を加え、文化十二年版以降に示された光琳像（イメージ）について考察を始めた。しかしながら、章の途中で与えられた紙数が尽きてしまった。

『尾形流略印譜』刊行後に著された諸書に本書が与えた影響や成立の背景等についても検証すべきであろうが、次稿にゆだねることとしたい。

註

〔20〕「江戸時代における光琳像の変遷について（上）」同（中）「同（下一）」同（下二）」同（下一三）」同（下一四）」同（下一五）」同（下一六）」（『愛知教育大学研究報告』第50・52・54・58・61・63・64・66輯（芸術・保健体育・家政・技術科学編）二〇〇一〜一七年。なお、本稿における章や註、表、図の番号は前稿を引き継いでいる。また、前稿に掲げた「表20」は本稿の内容とも関わるが再掲することを避けた。前稿を参照されたい。

〔21〕玉蟲敏子『生き続ける光琳』吉川弘文館、二〇〇四年。

〔22〕註〔20〕前掲、拙稿（下一一）。

〔23〕註〔20〕前掲の拙稿（下一五）において、芦舟の名を正しく表記するのは明治版に始まると

した。現存する書に限っての指摘だったが、その限定を外した場合其は其一増補本が最初に芦舟の名を正しく表記していることになる。

(254)『光琳百図』後編の跋に、「緒方先生の繪かける所月々に日に目に目にさへきるものは筆にまかせ書集けるかや、一百圖に余りぬ今年文政丙戌の六月光琳忌の一助に備へ又是を百圖後編と名づけ二冊に綴て同好の人にあたへむと梓に行ことにはなりぬ 抱一暉眞誌」とある。

(255) 玉蟲氏、註(251) 前掲書。

(256) 友禪(『古画備考』二十四)、破笠(『古画備考』十二下)、伊豊の項に「光琳印譜」からの引用であるという注記はないが、記載内容が明治版と一致することから表に加えた。

(257)『古画備考』の順定の項目には「備考第二十四名画十二ノ處二出ス可合考」と注記されており、該当箇所を参照すると『本朝画纂』が引用されている。

(258) 相見香雨「光琳乾山が事ども一抱一に依て伝へられたる」『日本美術協会報告』七、一九二八年(『日本書誌学大系45(一) 相見香雨集一』(青雲堂書店、一九八五年)所収)。

(259) 玉蟲敏子「『古画備考』卷三五「光悦流」の問題」『原本「古画備考」のネットワーク』、思文閣出版、二〇一三年。

(260) 朝岡興禎は『古画備考』の何帛の項目で抱一(別号・屠龍)の談話を「屠龍君話」として記している。

(261)『光琳漫画』については東京藝術大学附属図書館所蔵の文化十四年版による。

(262) 註(250) 前掲、拙稿(下―四) 註(200)。

(263) 註(250) 前掲、拙稿(中)。

(264) 拙稿「『新撰和漢書画一覽』小考―江戸時代中期鑑画知識の一樣相―」『京都美学美術史学』第二号、二〇〇三年。

(265)『新撰和漢書画一覽』画家部の内容は、文政四年版で天明六年版より三十名増補し、天保六年版ではさらに二名追加している。ただし、天明六年版に収録されている絵師の名号や略伝はそのまま受け継がれている。

(266) 註(250) 前掲、拙稿(下―四)。

(267) 東京都立中央図書館加賀文庫所蔵の文化十五年版によると、『本朝古今書画便覧』は江戸・須原茂兵衛、浪花・森本太助、京師・中川藤四郎、中川新七、林伊兵衛、藤井孫兵衛、小川源兵衛、森太兵衛により刊行された。なお、同書については加賀文庫所蔵本による。また、文久二年(一八六二)に刊行された『本朝古今新増書畫便覧』は同書の増補再版本である。

(268) 註(250) 前掲、拙稿(下―四)。

(269) 註(250) 前掲、拙稿(下―四)。

(二〇一七年九月二十五日受理)

〔表21〕 古画備考引用本と明治版『尾形流略印譜』

	朝岡興禎編『古画備考』三十五「光悦流」(嘉永4年(1851)起筆)引用「光琳印譜」	中野其明編『尾形流略印譜』(全26丁)、明治25年(1892)刊：備考
3オ	【本阿彌光悦】本阿彌光悦は慶長年間の人以書海内に鳴る画又一風を為す宗達光琳の祖とするところなり尤古土佐の風によりて細筆の哥仙など世に残決あり草画金銀にて繪き淡彩も稀に有り／「光悦」(黒方)〈光琳印譜〉	1オ 「寛永七年鷹峯隱士歳七十三「光悦」(黒方)、「光悦」(黒長方)」(19オ)『古画備考』になし
5オ	【俵屋宗達】宗達喜多川氏住吉如慶門人也一家ノ風ヲ起シテ花卉ニ妙ヲ得タリ法橋ニ叙ス後加州侯ニ仕テ子孫今ニ有ト云寛永年間ノ人ナリ 〈光琳印譜〉	1ウ
7オ	宗達／喜多川氏俵屋宗達は住吉法眼如慶の門人なり一家の風を起して花卉に妙を得たり法橋に叙す後加州侯に仕て子孫今に有といふ寛永年間の人なり／宗達法橋「對青軒」(朱円)、「伊年」(朱円)「伊年」(朱円)、「對青」(朱円)、「□□」(朱円)〈已上光琳印譜〉	1ウ 2ウ 2オ
10オ	【北川宗説】宗悦 叙法橋喜多川氏／喜多川法橋相説「伊年」(白方)、「宗説」(朱円)〈光琳印譜〉	4オ
10ウ	【野々村通正】信武 野々村通正といふ又俵屋と号す／通正信武七十七歳筆「野」(朱方)、「通正信武」(白方)〈光琳印譜〉	4オ
11ウ	【順定号宗仙】順定／「順定」(朱方重郭)、順定「宗仙」(白方)、「伊年」(朱円)〈光琳印譜宗達ノ次ニ出〉	3オ
(付箋)	宗仙 叙法橋／「宗仙」(朱文円印)〈順定ノコト歟／光琳印譜別ニ出〉	4ウ
12ウ	【宗雪】宗雪／宗雪「宗雪」(朱方)、「伊年」(朱円)〈光琳印譜〉	3ウ
13オ	【野々村是真】是真「塾村是真印」(朱方)〈光琳印譜〉	4ウ
(13ウ)	【雛屋立圃】『古画備考』十二下〔雛屋立甫 宗達弟子俳諧は貞徳宗因に學ふ／雛屋立圃「□□之印」(白方)、「松翁」(朱方)、立甫「日□」(朱瓢)〈光琳印譜〉〕	4ウ 「雛屋立甫宗達門弟／立圃書「甫」(朱方郭内円)」(21オ)『古画備考』になし
(13ウ)	【友禪】『古画備考』二十四〔「画□」(朱小長方)、扶桑扇工友禪圖「友禪」(白小方)「□物象形」(朱方)、「友禪」(朱团扇)〕	16オ

(13ウ)	【破笠笠翁】『古画備考』十二下〔卯親子笠翁行年八十有五画賛「(印文不詳)」(朱方)〕	16ウ
13ウ	【伊豊】伊豊は宗達門人か雪竹の圖又墨観音を見る画多く不見故画跡も不詳／伊豊「伊豊」(白方)	15ウ
18ウ	【尾形光琳】光琳(光琳印譜)／尾形宗謙か子時を隔て宗達の風を慕山本素軒の弟子となり後法橋に叙すと浅井不舊の印譜に見へたり又尾形を緒方と改む花卉を画き人物に至てはいよゝゝ古土佐の風韻を学ふ當流の逸筆世に知るところなり／享保元年(丙申)六月二日卒歳六十二京都小川頭妙顯寺中本行院に葬す／長江軒寂明青々光琳居士と有り／「惟富」(朱方)、「堆翠」(朱円)、「尾形」(白方)、「惟富之印」(白方)	5 オ 5 ウ 6 オ 6 ウ
19オ	法橋光琳「伊亮」(朱円)、「方祝」(白方)、「青々斎光琳「寂明」(白方)、「光琳」(白長方)、「光琳」(白小方)、「道崇」(朱円)、法橋光琳「方祝」(朱方)、「法橋光琳」(白長方)、「方祝」(朱方)	7 オ
19ウ	「方祝」(朱円)、法橋光琳「青々」(朱円)、「澗聲」(白方)、「道崇」(白方)、法橋光琳「道崇」(白方)、法橋光琳「道崇」(朱方)、「澗声」(白方)、「澗声」(朱方)	7 ウ
20オ	「(印文不明)」(方)、「光琳」(白方)、「光琳」(朱円)、「光琳」(朱円)〈坦書入長一寸五分 梅画横絹／文字ハコレト同ク一寸六分ノ印アリ琳ノ下ヒロシ輪太シ切タル所ナシ)、「寂明」(白方)、「光琳」(朱方)、「光琳」(朱方)、法橋光琳「澗声」(白方)、法橋光琳(花押)、法橋光琳(花押)	8 オ 8 ウ
20ウ	「澗声」(朱円)、「緒方」(朱方)、「尾形」(朱瓢)、法橋光琳「緒方氏」(白方)、元禄七年戊ノ十月晦日 尾形光琳(花押)「日受」(黒円)	9 オ
21オ	法橋光琳「光琳」(朱方)、法橋光琳「澗声」(朱方)、「成乙」(朱円)、青々斎光琳「寂明」(朱方)、青々光琳「方祝」(朱方)	
22オ	【方淑(光琳男寿一郎)】光琳子壽市郎「方□〔淑〕」(朱方)〈光琳印譜〉	明治版(12ウ)「光琳子壽市郎方淑／光琳孫以十画「光是之印」(朱方)」、(21オ)「光琳子壽市郎方淑／「方淑」(朱円)」
22オ	【光是(光琳孫)以十】光琳孫以十画「光是之印」(朱方)〈光琳印譜〉	明治版(12ウ)「光琳孫以十画「光是之印」(朱方)」
23オ	【乾山】光琳の弟なり陶工は世に知る處又紫翠深省と号す詩哥画讀など多く有寛保三年卒歳八十一〈光琳印譜〉	10オ
27ウ	深省「習靜堂」(白長方)、「深省」(朱円)、八十一老漢深省画、「逃禪」(朱長方)、「深省」(白方)、「靈海」(朱方)、「長尚」(朱方)、「袋型花押」〈光琳印譜〉	10オ 10ウ
29オ	【何昂】何昂 立林立徳加州侯の医官なり後忘名して江戸に来白井宗謙と言ふ乾山直弟にて實に光琳三世の画也宝暦年間の人／何昂「方祝」(朱円)、「□□之□」(白方)、何昂「太青之印」(白方)、「(印文不明)」(方)、何昂「文定之印」(朱円)〈坦書入／墨画太キ竹下ニ葉一叢アリ〉	11オ 11ウ
29ウ	鶴岡逸民何昂、鶴岡野史何昂、逸民「方祝」(朱円)、喜雨斎〈光琳印譜〉	
30ウ	【渡邊始興】始興 渡邊求馬近衛豫樂院家熙公の家士也光琳門人にて尤其風を得たり末葉は加茂社家に有と言ふ〈光琳印譜〉	12ウ
31オ	渡邊始興「始興之印」(白方)、渡邊始興「始興之印」(白方)、渡邊始興筆「始興之印」(白方)〈光琳印譜〉	13オ
31ウ	【始房(始興男乎門人乎出于光琳印譜)】始房画「(不詳)」(白円)「始房之印」(白方)〈光琳印譜〉	15ウ
32オ	【一樹】一樹 何人か知らず光琳宗達の遺風有り元禄以前のものなるへし／「(印文不詳)」(白壺)、「式樹」(朱方)〈光琳印譜〉	14ウ
33オ	【永田友治(号青々子)】「方祝」(朱円)〈光印〉、青々子永田友治「友治」(黒方)〈光印〉、「友治」(白方)〈光印〉、青々子「方祝」(朱円)〈光印〉	15オ 15ウ
33ウ	【藤原古致】藤原古致「古致」(朱方)〈光印〉	16ウ
34オ	【長洲】大坂人安永天明比人／「長洲」(朱円)〈光印〉	明治版は「浪華の人光琳の遺風を學ぶ安永天明のころの人なり」(14オ)
34オ	【芦舟】按應挙弟子芦雪嗣也上人誤テ印譜ニ入ト云／「蘆舟」(朱円)〈光琳印譜〉	明治版は「光琳遺風何人かしらす」(14ウ)
34ウ	【俵屋宗理】宗理初め住吉廣守の門人後光琳の風を画く明和安永の比の人なり〈光琳印譜〉	13ウ
35オ	「元知」(朱円)、「宗理」(朱方)、「命根」(朱円)〈光琳印譜〉	「百琳斎宗理筆「□□□□是」(白方)」(21オ)『古画備考』になし

